

わが律法を……彼らの心に刻みつける。

(『エレミヤ書』三一章33節)

預言者たちは、民の罪を糾弾し、神の審判を告知したが、イスラエルの滅亡を望んだのではない。彼らは民のゆくえに心をくだく、真の愛国者であった。絶望的な状況のなかで、民の将来に希望のともしびを掲げたのも彼らである。

たとえば、八世紀後半に南王国で活動した預言者イザヤは、現実のダビデ王朝に深く失望するなかで、理想の王の到来を告げた。この王は知恵と知識の霊、思慮と勇気の霊に満たされ、神ヤハウエを畏れ、正義と公正をもって社会的弱者の権利を保護するであろう、と言う。いわゆるメシア預言である。その百年後、預言者エレミヤは、神ヤハウエがイスラエルの民と新しい契約を結ぶ時代を望み見ていた。

イスラエルの民はシナイ山で結ばれた契約に基づく律法を守れなかった。しかし、新しい契約の時代がくる。そのとき、人々の心に神の律法が刻みつけられるので、もはや人々が神に背くことはなくなるであろう。エレミヤはこのように「新しい契約」の時代を描き出している。

預言者たちは、これらの預言の実現を目にすることはなかった。しかし、彼らが残した希望の預言は、それ以後も続く苦難の歴史のなかで、イスラエルの民に希望の光を投げ続けた。それだけではない。ナザレのイエスによってこれらの預言が成就した、と信じる一群の人々からキリスト教が世界に発展してゆくのである。